

古代から続く祈りの道 - 大和の石仏巡行 -

第10回 桜井市・金屋の石仏



元 久留米工業高等専門学校教授
伊藤 義文

1. 金屋石仏の材料

「地産地消」という言葉は食品に多く使われますが、石仏の場合でも該当します。大和の石仏の材料は、ほとんどが大和地域の石材を使用しています。ましてや磨崖仏の場合はその地域の石崖に直接彫刻するので、まさに「地産地消」そのものです。

ただし、このルールに当てはまらないケースが時々あります。今回の金屋石仏の材料は兵庫県播磨町で採れる^{たつやまいし}竜山石^{※1}であり、大和に搬入された時期も5,6世紀頃で、瀬戸内海を海運し、大阪湾から大和川を遡って金屋の地に運ばれてきたと思われる。

搬入された竜山石は、最初は大王の石棺として使用されていたもので、後の時代に石棺の板石部分を再利用して薄肉彫の釈迦如来立像と弥勒如来立像を彫ったものと考えられます。ほかにも大和地域で竜山石を利用した石棺の例として、御所市の宮山古墳（長持形石棺）、明日香村の岩山古墳（家形石棺）などがあります¹⁾。また大阪府堺市の仁徳天皇陵の石棺も竜山石を使用しています。

2. 地理

現在、金屋の石仏は金屋の集落から大神神社へと続く「山辺の道」沿いにある収蔵庫に保存されています。石仏は元々、平等寺^{※2}の厨子に置かれていましたが、明治維新

で廃仏毀釈の令が厳しくなり、寺と一緒に破壊されることを、村人たちによりミロク谷（三輪山）の谷間に移設されました（図1）。移設当時の写真が残されていたので併せて図1に示します。当時は、お顔の表情や衣文の模様などがはっきり見えており、大木にもたれるように立て掛けられています。しかし、好事家が拓本を取る等によって石仏が劣化してきましたので、収蔵庫（図2）を建て錠前をかけて保存するようにしたのですが、石仏は鉄格子の隙間からしか見えず、鑑賞しにくい状態です。



図1 三輪山ミロク谷（左）と移設された石仏の外観

※1 竜山石：兵庫県の加古川下流右岸で産出される流紋岩質溶結凝灰岩の石材の呼称で、後期白亜紀（約1億年前）の火山活動によって噴出した火砕流堆積物が厚く堆積したもの。竜山石は比較的軟質で加工しやすく、古くは仁徳天皇陵などの石棺にも使用され、今でも建築・造園用の石材として広く利用されている

※2 平等寺：平等寺は伝承によると聖徳太子が開創、慶円上人の中興と伝わる寺院。鎌倉時代末期頃から大神神社の別当寺の地位に立ち、「三輪別所」と称された。明治維新になって政府の廃仏毀釈の令が厳しく、大神神社の神宮寺であった平等寺では、有名な金屋の石仏をはじめとした61体にのぼる仏像が他所に運び出され、堂塔はことごとく整理を迫られたが、本尊十一面観世音菩薩、三輪不動尊、慶円上人像、仏足石等は守られ、現在は禅曹洞宗に改宗し法燈を護持している



図2 現在の収蔵庫



図4 泊瀬朝倉宮伝承地と仏教伝来の碑



図3 取材時に現地で見つけた海石榴市周辺の地図



図5 弥勒如来立像(左)と釈迦如来立像(右)

3. 歴史

金屋の辺りは古代の市場、**海石榴市**があった所です。当時は三輪、**石上神宮**を経て奈良に至る**山辺の道**、初瀬を越え伊勢に至る**初瀬街道**、飛鳥地方への**磐余の道**・大阪堺からの**竹内街道**などの道がここに集まり、また大阪難波からの舟の便もあり、大いにぎわいました(図3)。近くには雄略天皇の**泊瀬朝倉宮**と比定されている**白山神社**や、**仏教伝来の地碑**(図4)などもあり、古代大和朝廷の中心地であったと考えられています。

4. 石仏

凝灰岩製の石板に浮彫(レリーフ)されたもので、図5の左が弥勒如来立像、右が釈迦如来立像とされています。やや風化していますが重厚な表情が印象的で、国の**重要文化財**に指定されています。板石のサイズは高さ2.1m、幅90cm、厚み21cmで、側面に段を付け石枠にはめ込むように加工されています。

許可をいただき収蔵庫の内部に入り間近に石仏を観察すると、面相は平安期の彫技に見られる**重厚な表情**をされており、その浮き彫りされた**衣文の線**は流れるように美しく、様式や技法から平安後期の作と考えられます。また、見事に繊細な蓮華座は奈良様式の伝統を受け継いでいます。図6に地元の喜多祥介氏による、拓本を基にしたスケッチを示



図6 拓本を基にした石仏のスケッチ図 (提供:喜多祥介氏)

します。衣文の線や蓮華座の図様がよく分かります。

5. 石棺

石仏収蔵庫の下には、加工痕のある2つの石材が置かれています。これらは石仏とは無関係ですが、このうち1つは**阿蘇ピンク石**^{*3}製の**家形石棺**です(図7)。大きさは高さ約35cm、幅約95cm、長さ約2mで、外面には長側辺に2カ所ずつ、計4カ所に縄掛突起が存在しています。こうし



図7 家形石棺の調査状況

た形態的特徴から5世紀末頃のものと考えられますが、この石棺が使用された古墳に関しては一切知られていません。

※3 阿蘇ピンク石: 阿蘇山麓で産出される溶結凝灰岩を指し、乾燥した状態でピンク色をしているため、こう呼ばれている。また熊本県宇土市の馬門付近で採掘されるため、馬門石とも呼ばれている。当初は産出地周辺のみで使われていたが、古墳時代中期末～後期前半には、近畿・瀬戸内地域のみで石棺材として利用され、再び地元でも使われるのは古墳時代後期からと言われている

6. まとめ

金屋の地が古代大和朝廷の中心地であったことから、兵庫の竜山石や阿蘇のピンク石など日本各地から運ばれてきた材料を使った大王の石棺が、この辺りに埋蔵されていたと考えられます。

金屋の石仏は、昔々石棺に使用されていた竜山板石を転用して、平安時代末期あるいは鎌倉時代初期に造像され、平等寺の厨子に安置されていました。しかし明治維新の廃仏毀釈により三輪山のミロク谷に移設され、現在は収蔵庫に保管されています。山辺の道を歩く人々がこの数奇な運命を辿った石仏を十分に鑑賞できるように、相応しい**展示・保存施設**があれば良いのと思っています。

今回の石仏の動画はYouTubeにアップロードしています

ので、ぜひ次のキーワード検索で美しい動画をご覧くださいければ幸いです。

・検索：桜井市・金屋の石仏－ YouTube

URL： <https://www.youtube.com/watch?v=NJmKZDluHVY&t=2s>

・検索：桜井市・金屋 海柘榴市（つばいち）と大王の石棺－ YouTube

URL： <https://www.youtube.com/watch?v=0cF5SYzAQOc&t=8s>

<引用文献>

- 1) 島津光夫: 古墳の石, 新潟応用地質研究会誌第66号, p.20 (2006年7月).

著者略歴



1947年生まれ。72年、京都大学大学院卒業。以降、民間企業にて真空蒸着技術のフィルム応用や各種包装材料の開発に携わる。2004年、久留米工業高等専門学校教授。15年、退職。ライフワークとして石

仏調査を行い、その成果をYouTube (<https://www.youtube.com/channel/UCvJiTXSHW2MoqwdpszXcOQ>) に公表している。
✉ itou910@zeus.eonet.ne.jp